



作品に取り組む匠のまなざしは、  
厳しく、そしてあたたかい



▲安達焼き 斎藤貞雄さん

## 安達焼



窯元がー  
い福島県中  
通り地方で  
昭和43年に  
地元出身の  
斎藤貞雄氏  
が「安達窯」

を起こし、安達焼が生まれました。  
木節系の粘土と地元産の陶石を用い、穴窯で7日間かけて焼き上げた作品は、シンプルながら濃厚な味わいの中に、土のぬくもりが感じられます。斎藤氏の安達焼は多数の展覧会にも入賞するなど、高い評価を得ています。そして、茶道用陶器から花器、普段使いの器、美術工芸陶器などの作品は広く愛されています。

上川崎地区は、1000年以上の歴史を誇る手漉き和紙の産地です。古くは平安時代の中期に始められたといい、真弓(檀)を原料にしたことから「まゆみがみ」として、紫式部や清少納言らに用いられたといわれています。産業の近代化に伴い上川崎和紙も衰退してしまいましたが、町では和紙の保存に

取組み「安達町和紙伝承館」を設立、和紙の伝統と魅力を今日に伝えていきます。原料の楮を育てるところから、厳冬の丹念な水洗い、一枚一枚漉きあげるまで、手をかけ心を込め仕上げていきます。昔ながらの技があつてこそ、和紙ならではの風合いが生まれるのです。



▲上川崎和紙漉き 安齋保彦さん



▲和紙製品

